

ラオ語の諾否疑問文について

鈴木 玲子

1. はじめに

1.1. 目的

本稿では、ラオ語の/bɔɔ/疑問文を質問の焦点という観点から検討することによって、/bɔɔ/疑問文の統語論的特徴とその意味について考察することを目的とする。

1.2. 疑問助詞/bɔɔ/について

ラオ語の諾否疑問文は、平叙文末に疑問助詞/bɔɔ/を置くことによって作られる。例えば、平叙文 1) を諾否疑問文 2) にすると次のようになる。

1) **láaw pǎy hóoghían**

〔彼女〕〔行く〕〔学校〕

「彼女は学校へ行きます」

2) **láaw pǎy hóoghían bɔɔ?**

〔彼女〕〔行く〕〔学校〕(疑問助詞)

「彼女は学校へ行きますか?」

実際には話し手の発話意図によって、[bɔɔ]以外にも[bɔ́ɔ][bɔ̀ɔ][bɔʔ][bɔ́ʔ]など、さまざまな音声バリエーションを持つ。これらは話し手の発話意図を含んだ「場面」によっては必ずしも答えを必要としない場合もあるが、本稿では基本的には「はい」あるいは「いいえ」の答えを要求する疑問文の場合に限って検討していく¹。

1.3. 「質問の焦点」について

本稿の「焦点」とは、「話し手が最も関心のあること」即ち、「聞き手に最も伝えたいこと」を意味する。従って、「質問の焦点」とは、「質問者が応答

¹ 疑問文とは語用論的多義として取り扱われる言語現象であり、その疑問文が答えを必要とするかしないか、またどの部分が焦点であるかは語用論的な領域であろう。(小林 1993:151)

者に最も聞きたいこと」をさす。

例えば、「Aが外出する」とBに言った。それを聞いたBは、昨夜Aが水着を出していたことを思い出し、「Aは泳ぎに行くのか、それとも他のところか」を聞く。この場合、「外出の目的」を聞きたいということになる。これをラオ語で示すと、

3) pǎy lǎynám bǎw ?

〔行く〕〔泳ぐ〕

「泳ぎに行きますか？」

となり、質問の焦点は「pǎy (行く)」の目的である下線部の「lǎynám (泳ぐ)」²にあるということになる。

1.4. インフォーマント

インフォーマントとして協力して下さったのは、ラオ族、ヴィエンチャン生まれヴィエンチャン育ちのモンペット・カンタヴォンサイさん(30歳・女性)である³。両親ともにラオ族、ヴィエンチャン生まれヴィエンチャン育ちで、氏自身は2006年4月に来日、2007年4月より東京外国語大学大学院に在籍中である。

1.5. 「成分」について

成分は、主語(S)、動詞(V)、目的語(O)、形容詞(Adj.)、副詞句(Adv.)、(以下、順にS, V, O, Adj., Adv. と略す)をとり挙げる。次章よりこれらの各成分や動詞句全体(VP)に焦点がある場面の/bǎw/疑問文を考えていく。

Sは、場面や文脈によって既知であれば省略されるのが普通である。実際、Sの有無が疑問文の使用許容度の差となって現れることがなかったことから、Sの有無については詳しくは検討しない。

Vは、原則として「行く」「走る」など、動作を表す語で、一つの文に一つだけ用いることにする。

Oは、動詞の意味を補う不可欠要素のことである。また「本を読む」と「この本を読む」はそれぞれ、「不定のO」と「定のO」という表現を用いる。

Adj.は、「遠くへ行く」「速く走る」などの「遠くへ」「速く」の部分で、動詞を修飾することができる他、/kwaa/ («より～»)を伴って「より速い」「より遠い」という比較の表現ができる語とする。

² 以下、焦点のある部分を下線で示す。

³ 御協力に心より感謝申し上げます。

Adv. は、動詞句全体を修飾するもので、必要に応じて「時を表す Adv. (以下、「Adv.-t」と略す)」と「場所を表す Adv. (以下、「Adv.-p」と略す)」を考える。

また Q は、疑問助詞/**בוּ**/を表す。

1.6.「使用許容度」について

「使用許容度」(以下、「許容度」と略す)とは、ある場面において、発話される文の使い易さ度のことである。「許容度」は、許容度の高いものから順に、「◎、○、△、×⁴」の順でインフォーマントにつけてもらった。

これら許容度の差は、文法上の問題をはじめ、場面上や文体上(より丁寧、より親密度が増す、など)の問題や語彙そのものの意味など、さまざまなことが起因すると考えられる。従って、各々の文の許容度間の差は、絶対的な差ではなく、相対的な差であり、場面や語彙が変われば、許容度間の差も変わることがあり得るであろう。

2. 疑問文の原則

2.1. 疑問文の型

/**בוּ**/疑問文がどのような場面で何に焦点があるときに使われているのか、という点に着眼する。すると/**בוּ**/疑問文には次のような型があることがわかる。

- ① 正序式疑問文：/**בוּ**/を文末に置く、統語上最も普通の語順である「S+V+O(+Adv.)+/**בוּ**/」あるいは「S+Adj. (+Adv.)+/**בוּ**/」をとる構文。ただし、統語上、焦点のある成分の後ろに位置する成分は省略する。また、焦点のある成分の前に位置する成分は省略してもしなくてもよい。
- ② 移動式疑問文：①の語順のときに統語上、焦点のある成分の後ろに位置する成分を文頭に置く構文。
- ③ 分裂式疑問文：「焦点のある成分+/**בוּ**/」を述べ、残りの成分は全て省略してしまうか、その後で全て述べる構文。ただし、Sに焦点がある場合以外はあまり使わない。また/**בוּ**/の後、何も述べない形の方がよい。

上述の①から③の構文を例で示すと次のようになる。

例えば、A は市場から帰ってきた B が長い包みを持っているのを見て、今朝、買って来たのは (フランス) パンかどうかを聞きたい場合、下記の疑問文が

⁴ 許容度は順に、○は普通に使えるもの、△は使えなくはないがあまり使わないもの、×は使えないもので、◎は○の中でも最も自然でよく使うものがある場合に使用する。

使用できる.

型:	成分	:	例文
4a)	①	{S+}V+ <u>0</u> +Q?	{A} súw khàwcií bɔɔ ?
4b)	②	Adv. {S+}V+ <u>0</u> +Q?	múwsáwníi {A} súw khàwcií bɔɔ ?
4c)	③	<u>0</u> +Q?, {S+V+Adv.}	khàwcií bɔɔ ? {A} súw múwsáwníi

A:氏名 **súw**:買う **khàwcií**:パン
múwsáwníi:今朝 **bɔɔ**:(疑問助詞) { }:ない方がよい
①②③は/**bɔɔ**/疑問文の型番号

これらのうち、③の分裂式疑問文は、本来は①の正序式疑問文に属すると考えられる。以下にその理由を示す。

例えば、Aが「昨日、先生と会ってこれを預かってきた」と言って、Bに預かりものを渡したとする。そのときBは「Aは先生と学校で会ったのか(それとも他の場所か)」を聞きたいとき、即ちAdv.に焦点があるときに使用できる疑問文とその許容度は次のとおりである。

型:	成分	:	許容度:	例文
5a)	①	{S+}V+ <u>0</u> + <u>Adv.</u> +Q?	◎	{A} pǎyhǎa ?ǎacǎan yuu hóonhían bɔɔ ?
5b)	①	{S+}V+ <u>Adv.</u> +Q?	○	{A} pǎyhǎa yuu hóonhían bɔɔ ?
5c)	③	<u>Adv.</u> +Q?	△	yuu hóonhían bɔɔ ?
5d)	③	<u>Adv.</u> +Q?, {S+}V+ <u>0</u>	△	yuu hóonhían bɔɔ ? {A} pǎyhǎa ?ǎacǎan
5e)	③	<u>Adv.</u> +Q?, {S+}V	×	yuu hóonhían bɔɔ ? {A} pǎyhǎa

A:氏名 **pǎyhǎa**:訪ねる **?ǎacǎan**:先生
yuu: ~で **hóonhían**:学校 **bɔɔ**:(疑問助詞) { }:ない方がよい

上述の場面で使用できる/**bɔɔ**/疑問文は5a)~5d)の4つである。このことからAdv.に焦点がある場合、「①正序式疑問文」か「③分裂式疑問文」のいずれかの疑問文を用いる。その際、①の場合は焦点の前にある0は省略してもしなくてもよく、一方③の場合は「Adv.+Q?」の後には「V」だけを述べるのではなく、残りの成分全てを述べなければならない、という特徴がある。

仮に「5d)Adv.+Q? {S+}V+0」が単純に「5a) {S+}V+0+Adv.+Q?」の焦点「Adv.」より前の部分である「{S+}V+0」を省略して、いわば念押しのための補足追加部分として疑問詞の後ろで繰り返した型であるとするならば、「5e)Adv.+Q? {S+}V」も「5b) {S+}V+Adv.+Q?」の補足追加部分として後ろで繰り返した型であり、非文とはならないはずである。ところが、上の表5e)で示すとおり非文

となる。またインフォーマントに「5d) Adv.+Q? {S+}V+0」をごく普通の語順に言い換えてもらおうと、「5a) {S+}V+0+Adv.+Q?」ではなく、「NP1 [{S+}V+0] + copula⁵ + NP2 [Adv.] +Q?」という名詞述語文(5f)になった。

5d) **yuu hóonhían bəə ?** {A} **păyhăa ?ăacăan**

「学校ですか？ Aが先生を訪ねたのは」

成分： Adv. + Q ? {S} + V + 0

は次のようになる。

5f) **bəən thii** {A} **păyhăa ?ăacăan meen yuu hóonhían bəə ?**

[場所][関係代名詞][A][訪ねる][先生](copula)[～で][学校](疑問助詞)

「Aが先生を訪ねた場所は学校ですか？」

成分： NP1(N+conj.+S + V + 0) + copula + NP2(Adv.) + Q ?

また0に焦点がある場合の例4c)も同様に、

4c) **khàwcií bəə?** {A} **súuw múwsâwnîi**

「パンですか？ Aが今朝買ったのは」

成分： 0 + Q ? {S} + V + Adv.

は次のようになる。

4d) {A} **súuw múwsâwnîi meen khàwcií bəə ?**

[買う][今朝] (copula) [パン] (疑問助詞)

「Aが今朝買ったのはパンですか？」

成分： NP1(S+V + Adv.) + copula + NP2(0) + Q ?

以上のことから「③分裂式疑問文」は、「①正序式疑問文」の単純な倒置形ではなく、③は「NP1+copula+NP2」の「NP1+copula」が省略され、述部「NP2」のみを述べた型であると考えられる。このように考えると、先の③「ただし、Sに焦点がある場合以外は、あまり使わない。また、/bəə/の後、何も述べない形の方がよい。」という制約も、実は述部「NP2」であるとする、/bəə/疑問文の焦点は全て/bəə/の直前に置かれる(後述2.2.)、ということで統一でき、なんら矛盾が生じない。また、諾否疑問は元来、叙述部分である述部を質問する、という性格にも合致する。従って、③は元来「NP1+copula+NP2」という名詞述語文という構文で、型としては「①正序式疑問文」に属する型の疑問文なのである。

⁵ NPは名詞句。copulaは日本語の「～である」に相応する名詞句と名詞句をつなぐ語。

型： 成分 許容度： 例文

5a)	①	{S+}V+0+Adv.+Q?	◎	{A} <u>păyhăa ?ăacăan yuu hóoghían bɔɔ</u> ?
5b)	①	{S+}V+Adv.+Q?	○	{A} <u>păyhăa yuu hóoghían bɔɔ</u> ?
5c)	③	Adv.+Q?	△	<u>yuu hóoghían bɔɔ</u> ?
5d)	③	Adv.+Q? {S+}V+0	△	<u>yuu hóoghían bɔɔ</u> ? {A} <u>păyhăa ?ăacăan</u>

A: 氏名 păyhăa: 訪れる ?ăacăan: 先生
hóoghían: 学校 bɔɔ: (疑問助詞) { }: ない方がよい

/bɔɔ/疑問文は「①正序式疑問文」が最も許容度が高い。また名詞述語文の形も使える。このとき、動詞述語文よりは許容度が下がるが、焦点のある「学校で」を/bɔɔ/の直前に置く(5c, 5d)点では4)と一致している。

2.2.3.Vに焦点がある場合

例えば、前日、BがAに「鉛筆を買ってきてほしい」と頼んだ。翌日、「昨日Aは鉛筆を買ったか(それとも買わなかったか)」を聞きたいときの疑問文、即ちVに焦点がある疑問文とその許容度は次のとおりである。

型： 成分 許容度： 例文

6a)	①	{S+}V+Q?	○	{A} <u>dây súuw bɔɔ</u> ?
6b)	①	{S+}V+0+Q?	○	{A} <u>dây súuw sɔɔ bɔɔ</u> ?
6c)	①	{S+}V+0+Adv.+Q?	×	{A} <u>dây súuw sɔɔ múuwáannîi bɔɔ</u> ?
6d)	②	Adv. {S+}V+Q?	○	<u>múuwáannîi</u> {A} <u>dây súuw bɔɔ</u> ?
6e)	②	Adv. {S+}V+0+Q?	○	<u>múuwáannîi</u> {A} <u>dây súuw sɔɔ bɔɔ</u> ?
6f)	②	0+{S+}V+Q?	△	<u>sɔɔ</u> { <u>múuwáannîi</u> } {A} <u>dây súuw bɔɔ</u> ?

A: 氏名 dây: (アスペクト辞⁶) súuw: 買う sɔɔ: 鉛筆
múuwáannîi: 昨日 bɔɔ: (疑問助詞) { }: ない方がよい

この場面も「①正序式疑問文」が最も許容度が高い。特筆すべき点は「①正序式疑問文」において、焦点があるVの後ろに位置する0とAdv.に省略必要度に差異があるということである。即ち、0は省略しなくてもよく(6a, 6b)、Adv.は省略しなければならない(6c)。また「②移動式疑問文」の場合も同様に0とAdv.の文頭移動度に差異がある。即ち、Adv.は文頭に移動できる(6d, 6e)が、0は文頭に移動できないことはないが、許容度が著しく下がる(6f)。従って、先の0やAdv.に焦点がある場合と比較すると、原則とし

⁶ dây, si?, lêewなどのアスペクト辞を入れた方が自然な場合にはその語を使用した文を用いて検討する。

て焦点がある「買う」を/bɔɔ/の直前に置く形になるが、0に限って焦点ではないが省略してもしなくてもよい、という相異点がある。

次に同様にVに焦点がある場合で、前日、BがAに「C市場で鉛筆を買ってきてほしい」と頼んだ。翌日、「C市場でAは鉛筆を買ったか（それとも買わなかったか）」を聞きたいときの疑問文とその許容度は次のとおりである。

型：	成分	許容度：	例文
7a) ①	{S+} <u>V</u> +Q?	○	{A} <u>dây suíw</u> bɔɔ ?
7b) ①	{S+} <u>V</u> +0+Q?	○	{A} <u>dây suíw sǎɔ</u> bɔɔ ?
7c) ①	{S+} <u>V</u> +0+Adv. +Q?	×	{A} <u>dây suíw sǎɔ yuu talàat</u> C bɔɔ ?
7d) ②	Adv. {S+} <u>V</u> +Q?	△	yuu talàatC {A} <u>dây suíw</u> bɔɔ ?
7e) ②	Adv. {S+} <u>V</u> +0+Q?	△	yuu talàatC {A} <u>dây suíw sǎɔ</u> bɔɔ ?
7f) ②	0+{S+} <u>V</u> + Q?	△	sǎɔ {yuu talàatC} {A} <u>dây suíw</u> bɔɔ ?

A:氏名 suíw:買う sǎɔ:鉛筆 yuu:～で
talàat:市場 bɔɔ:(疑問助詞) {}:ない方がよい

この場面も「①正序式疑問文」が最も許容度が高い。先の6)と異なる点はAdv. -t と Adv. -p で文頭移動度に差異があるということである。即ち、7)の0と Adv. -p の省略必要度は6)の0と Adv. -t の場合と同じであるが、Adv. -p の文頭移動度はAdv. -t の場合と異なり(6d, 6e)，0と同様に許容度が下がる(7d, 7e)。このような差異はあるものの、これまでの各成分に焦点がある場合と同様に、原則として焦点がある語を/bɔɔ/の直前に置く、ただし焦点ではない0は省略してもしなくてもよい、という特徴がある。

2.2.4. VP 全体に焦点がある場合

例えば、深夜遅く手紙を書いているAを見たBがAに「明日、郵便局に行くのかどうか」を聞きたいときの疑問文とその許容度は次のとおりである。

型：	成分	許容度：	例文
8a) ①	<u>V</u> +0+Adv. -t +Q?	○	<u>si? pǎy pǎysaníi múw?uwn</u> bɔɔ ?
8b) ②	Adv. -t+ <u>V</u> +0+Q?	○	<u>múw?uwn si? pǎy pǎysaníi</u> bɔɔ ?
8c) ②	<u>V</u> +0+Q? Adv. -t	△	<u>si? pǎy pǎysaníi</u> bɔɔ ? <u>múw?uwn</u>

si?:(アスペクト辞) pǎy:行く pǎysaníi:郵便局
múw?uwn:明日 bɔɔ:(疑問助詞)

次に同様にVP全体に焦点がある場合で、図書室に入ろうとしたAを見たB

が A に「図書室で本を読むのかどうか」を聞きたいときの疑問文とその許容度は次のとおりである。

型	成分	許容度	例文
9a) ①	V+0+Adv. -p+Q?	○	si? ?aan puím yuu hòṅsamút bɔɔ ?
9b) ②	Adv. -p+V+0+Q?	△	yuu hòṅsamút si? ?aan puím bɔɔ ?
9c) ②	V+0+Q? Adv. -p	×	si? ?aan puím bɔɔ ? yuu hòṅsamút

si?:(アスペクト辞) ?aan:読む puím:本
 yuu:～で hòṅsamút:図書室 bɔɔ:(疑問助詞)

例 8) および 9) の VP 全体に焦点がある場合も「①正序式疑問文」で、焦点のある語全てを /bɔɔ/ の直前に置く、という疑問文が許容度が高い。ただし、Adv. -t と Adv. -p に若干の差異があり、Adv. -t は文頭に移動しやすく (8b)、また名詞述語文の形も使える (9c)。それに対して Adv. -p は文頭に移動しにくく (9b)、名詞述語文の形は使えない (9c)。この差異は先の動詞に焦点がある場合と一致している。このことについては次の 2.3. で詳細に検討することにする。いずれにせよ焦点のある語を /bɔɔ/ の直前に置くという特徴がある。

2.2.5. Adj. に焦点がある場合

Adj. に焦点がある場合も同様である。例えば、「A が競争で速く走ったのかどうか」を聞きたいときの疑問文とその許容度は次のとおりである。

型	成分	許容度	例文
10a) ①	{S+}V+ Adj. +Q?	○	{A} leen wáy bɔɔ ?
10b) ①	従属節+{S+}V+Adj. +Q?	○	tǔɔn kheṅkhǎn kǎn {A} leen wáy bɔɔ ?
10c) ②	{S+}V+Adj. +従属節+Q?	×	{A} leen wáy tǔɔn kheṅkhǎn kǎn bɔɔ ?

A:氏名 leen:走る wáy:速い tǔɔn:～時
 kheṅkhǎn:競争する kǎn:互いに bɔɔ:(疑問助詞)

この場合も焦点ではない従属節「**tǔɔn kheṅkhǎn kǎn** (競争のとき)」を文頭に置く形の許容度は「○」であるが、従属節を主節の後に置く形は文法的であるにも関わらず、この場面では使用できない。即ち焦点のある語を /bɔɔ/ の直前に置くという特徴がある。

以上、さまざまな成分に焦点がある統語論上の特徴を検討すると、焦点のある語を文末(疑問助詞/bɔɔ/の直前)に置くという共通点がある。このとき、焦点の後ろに位置する成分を省略したものが先の①型であり、文頭に移動し

たものが先の②型なのである。よって、ラオ語の/bɔɔ/疑問文は統語上、次のような制約があると結論できる。

「原則として焦点のある成分を文末(/bɔɔ/の直前)に置く。

ただしその際、統語上、焦点のある成分のあとに置かれるような成分は省略する方がよいが、省略しない場合は文頭に置く。」

2.3.動詞との結束性

談話を進行させる上で、冗長度、丁寧度と言ったいわば運用上の問題が関係していると思われることが、許容度の差になって現れることはすでに見たとおりである。しかし、実際は成分によって、さらには同じ成分では「定・不定」によってごく僅かではあるが、運用上の問題や焦点化についての省略必要度、文頭移動度に差異があった。以下にこれら各成分間で見られた差異について検討していく。

2.3.1. Adv.に焦点がある場合

Adv. -t に焦点がある場合、先の例 5) で示したとおり、0 を省略してもしなくてもよい (5a, 5b) という特徴があった。また文頭移動はしてはいけない、という特徴もある (5g)。

型：	成分	許容度：	例文
5a) ①	{S+} V+0+Adv.+Q?	◎	{A} pǎyhǎa ʔǎacǎan yuu hóŋhían bɔɔ ?
5b) ①	{S+} V+Adv.+Q?	○	{A} pǎyhǎa yuu hóŋhían bɔɔ ?
5g) ②	0+{S+} V+Adv.+Q?	×	ʔǎacǎan {A} pǎyhǎa yuu hóŋhían bɔɔ ?

2.3.2. 0 に焦点がある場合

Adv. -p と Adv. -t とで文頭移動度⁷に差異がある。例えば、先の例 4) に見るように、Adv. -p を述べない形が最もよく (4a) , 文頭に移動するのは許容度が下がる (4e) 。一方の Adv. -t は省略しても文頭に移動しても許容度にほとんど差異はない (4a, 4b) 。

型：	成分	許容度：	例文
4a) ①	{S+} V+0+Q?	◎	{A} súw khàwcií bɔɔ ?
4b) ②	{S+} V+0+Adv.+Q?	○	múwsáwníi {A} súw khàwcií bɔɔ ?
4e) ②	Adv. {S+} V+0+Q?	△	yuu talàati {A} súw khàwcií bɔɔ ?

⁷ 厳密には「移動」ではなく、文の意味上、最初から文頭に置かなければならないものである。

2.3.3. Vに焦点がある場合

例えば、V「**?aan** (読む)」に焦点がある場合、Adv. は省略するか、文頭に移動しなければならない。また同じ Adv. でも Adv. -p より Adv. -t の方が文頭移動の許容度が高い(11j, 11k)。0 は不定の 0 は省略しなくてもよい(11b)が、定の 0 は少し許容度が下がる(11c)。またその逆で、文頭移動については、不定の 0 は移動できない(11h)が、定の 0 は許容度は低いが移動してもよく(11i)、両者はちょうど対称性をなす。0 が焦点のない成分であるにもかかわらず、省略しなくてもよいこと、また文頭移動してはいけないことは特筆すべき点である。また「速く読む」など、Adj. がある場合を考えると、統語論上、Adj. は V の後ろに置かなければならないが、V の後ろに置くと先の 2.2.5. に見るように Adj. に焦点がある疑問文になってしまう。従って V に焦点がある場合は、Adj. は省略⁸しなければならない(11l)し、文頭移動もできない(11m)。

型	成分	許容度	例文
11a)	① <u>V</u> +Q?	◎	?aan bɔɔ ?
11b)	① <u>V</u> +0+Q?	◎	?aan púim bɔɔ ?
11c)	① <u>V</u> +0+Q?	○	?aan púim hǔa nân bɔɔ ?
11d)	① <u>V</u> +{0+} Adv. +Q?	×	?aan { púim } múuwáannîi bɔɔ ?
11e)	① <u>V</u> +{0+} Adv. +Q?	×	?aan { púim hǔa nân } múuwáannîi bɔɔ ?
11f)	① <u>V</u> +{0+} Adv. +Q?	×	?aan { púim } yuu hóoghían bɔɔ ?
11g)	① <u>V</u> +{0+} Adv. +Q?	×	?aan { púim hǔa nân } yuu hóoghían bɔɔ ?
11h)	② 0+ <u>V</u> +Q?	×	púim ?aan bɔɔ ?
11i)	② 0+ <u>V</u> +Q?	△	púim hǔa nân ?aan bɔɔ ?
11j)	② Adv. -t+ <u>V</u> +Q?	◎	múuwáannîi ?aan bɔɔ ?
11k)	② Adv. -p+ <u>V</u> +Q?	○	yuu hóoghían ?aan bɔɔ ?
11l)	① <u>V</u> +0+Adj. +Q?	×	?aan púim wáy bɔɔ ?
11m)	② Adj. + <u>V</u> +0+ Q?	×	wáy ?aan púim bɔɔ ?

?aan: 読む **púim**: 本 **hǔa**: (本の類別詞) **nân**: その
múuwáannîi: 昨日 **yuu**: ~で **hóoghían**: 学校
wáy: 速い **bɔɔ**: (疑問助詞) 0: 定の 0 0: 不定の 0

これら許容度の差異は、VP 句内における各成分と V との結びつき(以後「結

⁸ この場合は疑問文自体の意味が異なってしまうということから「削除」と言うべきかもしれない。「省略」と「削除」についてはなお一層の考察を要する。

束性」という語を用いる) が強い、弱い、という観点をを用いることによって説明できるのではないだろうか。例えば、ある成分が V の前に移動し易いということや省略し易いということは、V との結束性が弱いからだ、と判断するわけである。このような観点から各成分別に焦点がある/ぶつ/疑問文の許容度を整理すると次のようになる。

省略必要度では、次のような差異が認められた。「0 は V に焦点がある場合でも省略しなくてもよい。ただし定の 0 は不定の 0 より省略必要度が上がる。Adj. は省略しなければならない。Adv. も Adv. -t、Adv. -p とともに省略しなければならない。」ただし例文調査で、語彙によっては Adv. -p は Adv. -t よりは許容されるという結果が得られたので、各成分の省略必要度の順は、「Adj. > Adv. -t > Adv. -p > 0 定 > 0 不定」である。

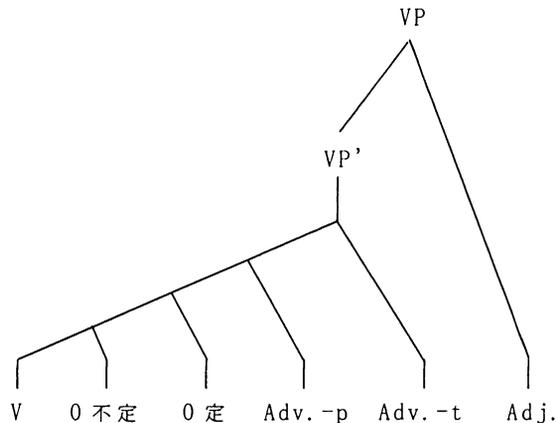
文頭移動度では、次のような差異が認められた。「Adv. -t は文頭にあっても何ら不自然な疑問文ではないが、Adv. -p、0 定、0 不定の順に許容度が低くなっており文頭に置きにくいということを示している。特に不定の 0 はほとんど文頭に置くことができない。また Adj. は文頭には置けない。」即ち各成分の文頭への置きやすさの順は、「Adv. -t > Adv. -p > 0 定 > 0 不定 > Adj.」である。

これらのことを表にまとめると下表のようになる。

表) V に焦点がある場合

成分	文頭移動度	省略必要度	V との結束性
0 不定	移動できない	しなくてもよい	1
0 定	移動しない方がよい	する方がよい	2
Adv. -p	移動してもよい	しなければならない	3
Adv. -t	移動できる	しなければならない	4
Adj.	移動できない	しなければならない	5

Adv. -t、Adv. -p、0 定、0 不定は段階的に少しずつ程度の差が見られる。Adj. は文頭に置くことができず、必ず省略しなければならないという点で他の成分とは性格を異としており、むしろ V と同等な資格を持つものと考えられる。即ち、意味上は V を修飾するものであっても、統語上は他の成分と同じ VP 内にはない成分であろう。一方の Adj. 以外の成分は同一 VP 内にあり、V との結束性が強ければ強いほど、V の近くに位置し独立性が弱く、V との結束性が弱ければ弱いほど、V より遠くに位置し、独立性が高い、と判断する。これを図式化すると次のようになる。



このような観点を用いることによって、各成分間に見られた焦点と省略、あるいは文頭移動についての差異や冗長度・丁寧度といった運用上の問題から来る差異を説明することができそうである。しかし、Vとの結束性という観点が、ラオ語の文構造を考える上で果たして本当に必要か否かは、個々の単語の意味から来る共起制限など、意味上の問題も含めて、より多くの検討が必要であると考えられる。従って本稿では/bɔɔ/疑問文における各成分の統語論上の差異の一要因として挙げておくにとどめる。

2.4. 疑問文の特徴

以上のことから、各場面における/bɔɔ/疑問文の特徴を次の原則にまとめることができる。

- 〔1〕 疑問文は正序式疑問文と移動式疑問文の型があり、正序式疑問文の方をよく使う。
- 〔2〕 原則として焦点のある成分を/bɔɔ/の直前に置く。
- 〔3〕 焦点以外の成分の省略必要度や文頭移動度は、成分によって差異がある。

3. /bɔɔ/疑問文の意味

例えば、

12a) câw dâ y pǎ y huán cít bɔɔ ?

12b) câw dâ y pǎ y huán cít bɔɔ ?

[あなた](アスペクト辞) [行く][家][チット](疑問助詞)

「あなたはチットの家に行きましたか？」

という疑問文は、動詞性の成分「チットの家に行った」に焦点がある(12a)か、名詞性の成分「彼の家」に焦点がある(12b)かによって答え方が異なる。

12a)の答え：肯定 **cáw, pǎy** 否定：**bɔɔ, bɔɔ dáy pǎy**
[はい] [行く] [いいえ] (否定辞) (アスペクト辞) [行く]
「はい，行きます」「いいえ，行っていません」

12b)の答え：肯定 **cáw, meen** 否定：**bɔɔ, bɔɔ meen**
[はい] [そうだ] [いいえ] (否定辞) [そうだ]
「はい，そうです」「いいえ，そうではありません」

12a)と12b)で答え方が異なるということは、とりもなおさず、疑問文の意味が異なる、ということに他ならない。そこで「聞かれていること」を述べている応答文から、逆に疑問文の「聞いていること・聞きたいこと」、即ち「疑問文の意味」を考える。

Vに焦点がある場合(13)と0に焦点がある場合(14)の応答文とその許容度は次のとおりである。

13)Q⁹: **múwáanní pǎy bɔɔ?**

[昨日] [行く] (疑問助詞)

「昨日，行きましたか？」

- A:
- | | |
|--|----------------|
| <input type="radio"/> cáw | 「はい」 |
| <input checked="" type="radio"/> cáw, pǎy | 「はい，行きました」 |
| <input type="radio"/> pǎy | 「行きました」 |
| <input checked="" type="radio"/> meen | 「そうです」 |
| <input type="radio"/> bɔɔ | 「いいえ」 |
| <input checked="" type="radio"/> bɔɔ, bɔɔ pǎy | 「いいえ，行きませんでした」 |
| <input type="radio"/> bɔɔ pǎy | 「行きませんでした」 |
| <input checked="" type="radio"/> bɔɔmeen | 「そうではありません」 |

⁹ Qは疑問文，Aはそれに対する応答文を表す。

¹⁰ 「はい」「いいえ」の返答単独形の許容度が高いのは、はっきり肯定か否定かを述べるよりも、場面によっては返答だけの方が婉曲的な表現で丁寧である、という文体上の問題もあると思われる。

14) Q: **pǎy huán cít bɔɔ** ?

[行く][家][チット] (疑問助詞)

「チットの家に行きましたか？」

- A: ○ **cáw** 「はい」
 ◎ **cáw, meen lêew** 「はい、そうです」
 ○ **meen lêew** 「そうです」
 × **pǎy** 「行きました」
 ○ **bɔɔ** 「いいえ」
 ◎ **bɔɔ, bɔɔ meen** 「いいえ、そうではありません」
 ○ **bɔɔ meen** 「そうではありません」
 × **bɔɔ pǎy** 「行きませんでした」

13)と 14)の応答文のちがいは、

- ① 動詞性成分に焦点→動詞性成分を使って答える
- ② 名詞性成分に焦点→**cáw, bɔɔ**という返答か、**meen, bɔɔ meen**で答える
これを疑問文、即ち「聞いていること・聞きたいこと」として言い換えると、
 - ①' 動詞性成分に焦点→「V」か「Vない」か
 - ②' 名詞性成分に焦点→「そうだ」か「そうではない」かとなる。次にこのことから/**bɔɔ**/疑問文の意味を考察する。例えば、

12a) **cáw dáy pǎy huán cít bɔɔ** ?

12b) **cáw dáy pǎy huán cít bɔɔ** ?

[あなた] (アスペクト辞)[行く][家][チット] (疑問助詞)

「あなたはチットの家に行きましたか？」

という疑問文は、VP 全体に焦点がある場合(12a)と 0に焦点がある場合(12b)では全く同一文になる。同様に、

15a) **láaw leen wáy bɔɔ** ?

15b) **láaw leen wáy bɔɔ** ?

[彼] [走る][速い] (疑問助詞)

「彼は速く走りますか？」

という疑問文は、VP 全体に焦点がある場合(15a)と Adj. に焦点がある場合(15b)では全く同一文になる。

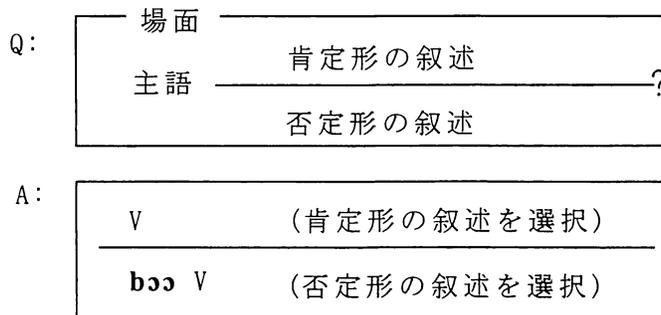
同じ語順からなる疑問文であるので、同じ意味の疑問文であると考えられ

るのが普通である。にもかかわらず質問に対する答えを述べている応答文に2通りの答え方がある。これはとりもなおさず聞いていることが異なるからに他ならないのではないだろうか。即ち、同じ語順からなる疑問文ではあるが、それは文法的に曖昧な文であって、実は焦点別に2つの意味を持っていると考えられるのである。

そこでこの2つの意味は、それぞれどのような意味であろうかということを検討していく。

まず、V, Adj. または VP 全体、即ち動詞性の成分に焦点がある場合は、それぞれその動詞性の成分、即ち「V」または「否定辞+V」を使って答えている。そしてこの「V」または「否定辞+V」を使って答えているということから、「V」あるいは「Vない」を使った答えを要求するこの疑問文は、どちらかの選択を要求している疑問文であると考えられる。このVとは、主題についての叙述部分である。従って、このとき「V」と答えれば、肯定形の叙述を選択しており、「否定辞+V」と答えれば、否定形の叙述をしていると換言することができよう。以上のことから「V」または「否定辞+V」を使った答えを要求するこの疑問文は、焦点を含む叙述の選択を要求している疑問文であると考ええる。

これは、



と図式化することができる。

一方、O または Adv. に焦点がある場合、即ち名詞性の成分に焦点がある場合は、**meen** または **bɔɔ meen** を使って答える。例えば、

16a) Q: **páy huán cít múw wáannìi bɔɔ ?**

「チットの家に昨日行きましたか？」

- A: ○ **cáw**
 ◎ **cáw, meen léew**
 ○ **meen léew**

- × pǎy
- bəə
- ◎ bəə, bəə meen
- bəə meen
- × bəə pǎy

先の動詞性の成分に焦点がある場合と同様に考えると、まず Adv. に焦点があるのだから疑問文は「Adv.」か「否定辞+Adv.」かを聞いていると考えられる。そしてもし、疑問文(16a)が「昨日」か「昨日ではないか」を聞いている疑問文であるならば、応答文もまた、「昨日」もしくは「昨日ではない」、即ち「Adv.」もしくは「否定辞+Adv.」を使って答えるはずである。これは、

16b)Q: pǎy huán cít múuwáannîi bəə ?

A: 肯定 ×múuwáannîi 否定 ×bəə meen múuwáannîi
「昨日です」 「昨日ではありません」¹¹

となる。ところが、このうち肯定の「múuwáannîi」も否定の「bəə meen múuwáannîi」も応答として許容されない。このとき、「múuwáannîi」や「bəə meen múuwáannîi」がラオ語で非文法的であって、存在しない文であるのではなく、この場合の応答文として許容されないのである。

一方で先の例 16a)でも示されているように、応答文は肯定は「meen」、否定は「bəə meen」のみで、Adv.のない応答文でもよい。応答としては「meen」または「bəə meen」が必要なのである。従ってこの疑問文は「Adv.」か「否定辞+Adv.」かを聞いている疑問文ではない。そして、「meen」または「bəə meen」を使って答えているということから、「meen」か「bəə meen」かを聞いている疑問文であると換言できる。即ち、「meen」または「bəə meen」を使った答えを要求するこの疑問文は、「そうだ(=正しい)」か「そうではない(=正しくないか)」の選択を要求している疑問文なのである。例えば、テーブルの上にお茶とコーヒーがあって、コーヒーが好きな A はきっとコーヒーを飲むのだと思い、そのことについて尋ねる場合、

17)Q: A kĭn kǎafée bəə ?

[A][飲む][コーヒー](疑問助詞)

A: meen

[そうだ]

¹¹否定の場合、もしこの「昨日ではありません」の後に「一昨日です」という質問内容について、否定内容と対照的な新情報の提供が続く場合は許容度が上がる(△)。

と図式化することができる。

ところで、動詞性成分に焦点がある場合、ごく少例ではあったが、「そうだ」「そうではない」を使って答えられた。これは、前後の因果関係が非常にはっきりしている場面に見られる。一般に、あることの理由や目的を尋ねるとき、少なくとも話し手はその事態の存在を前提としているということが言える。そしてこの場合の諾否疑問文は、前提から一つの命題を想定し、それが真か偽かを問う意味に他ならない。例えば、顔色の悪い人を見て、

19) Q: **bɔɔ sabǎay bɔɔ?**

(否定辞)[気分がいい](疑問助詞)

「気分が悪いのですか？」

A: ○ **mɛɛn/bɔɔ mɛɛn**

× **bɔɔ sabǎay/sabǎaydii**

「そうです/そうではありません」「気分が悪いです・気分がいいです」¹²

一方では動詞性の成分に焦点がある場面を与えた場合、ほとんどの場合「動詞性成分」または「否定辞+動詞性成分」で答えるという報告が得られる。一般に談話の中で動詞性成分に焦点がある場合は、叙述の選択をする疑問文に解釈されやすいということを示している。

即ち、談話中で動詞性成分に焦点がある場合、叙述の選択を要求する疑問文にとられやすいが、実は2通りの意味に解釈が可能な疑問文なのである。どちらの意味に解釈できるのかは、文脈や話し手が代替し得る他の補足情報を想起できるかどうかという語用論的な条件に依拠するものであろう。

例えば、高速道路をしばらく走っていたので、トイレに行きたいかを聞く場合は、

20a) Q: **si? pǎy hɛ̀nɛ̀nám bɔɔ?**

(アスペクト辞)[行く][トイレ](疑問助詞)

「トイレへ行きますか？」

A: 肯定 **pǎy**

否定 **bɔɔ pǎy**

「行きます」

「行きません」

一方、仕事中に立ち上がってトイレがあるドアの方へ行く人に聞く場合は、

¹²日本語にも非常に似た現象が見られる。本稿で述べた2つ目の意味は「～のだ構文」に相当するのかもしれない。これについては別稿で詳しく検討することにした。

20b) Q: **si? pǎy hǝŋnám bɔɔ?**

(アスペクト辞)[行く][トイレ](疑問助詞)

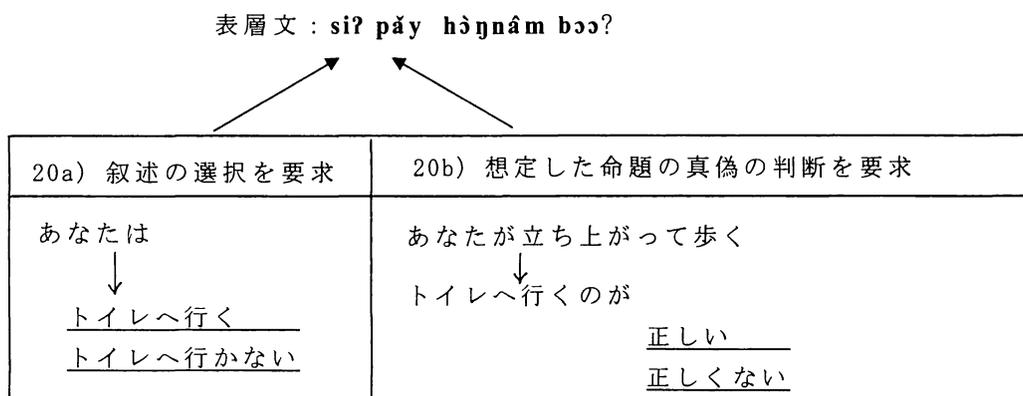
「トイレへ行くのですか？」

A: 肯定 **mɛɛn** 否定 **bɔɔ mɛɛn**

「そうです」

「そうではありません」

と2通りがある。以上のことから動詞性成分に焦点がある場合の/bɔɔ/疑問文は、実は2つの意味を有する疑問文であるということが出来る。このことを図に示すと下記のようなになる。



4. まとめ

/bɔɔ/疑問文を「焦点」という観点から検討することによって、次のことが明らかになった。

/bɔɔ/疑問文は、2つの意味を持っている諾否疑問文である。一つは「動詞性成分に焦点がある場合は、ある場面における叙述の選択（肯定か否定か）を要求している」という意味で、もう一つは「名詞性成分に焦点がある場合は、ある場面に対して質問者がたてた命題の真偽に対する判断を要求している」という意味である。

またラオ語の/bɔɔ/疑問文末 (/bɔɔ/の直前)は、その文における焦点か、もしくは焦点の一部であるという特徴がある。そしてこの特徴のために生ずる文における各成分の省略必要度および文頭移動度は成分によって差異がある。

参考文献

- 小林ミナ 1993「疑問文と質問に関する語用論的考察-特にそのスコープと焦点について」, 『言語研究』 104, pp.128-156.
- 久野暉 1983『新日本文法研究』大修館書店
- 牧野成一 1980 『くり返しの文法』大修館書店

/bɔɔ/ Interrogative Sentence in Lao

Reiko SUZUKI

The purpose of this paper is describing some features of /bɔɔ/ interrogative sentence in terms of ‘focus’. ‘Focus’ of a question in this paper means what information the speaker wants to know.

When the focus of a question depends on the verbal elements, the form of answering the question is ‘verb’ or ‘/bɔɔ/ verb’. And when the focus of a question depends on the nominal elements, the form of answering the question is ‘/mɛɛn/’ or ‘/bɔɔ mɛɛn/’. There are two kinds of forms for answering the question. It can be said that though /bɔɔ/ interrogative sentence has one form in the surface structure, it has two meanings in the deep structure. When the focus of a question is on the verbal elements, the sentence demands for choosing affirmation or negation of the predicate. On the other hand, when the focus of question is on the nominal elements, the sentence demands for judging truth or falsehood of the proposition.

It can be indicated that the focus of /bɔɔ/ interrogative sentence must be in the position at the end of the sentence (but before /bɔɔ/). For the sake of this, the non-focus element must be ellipted or set on the top of the sentence. Among non-focus elements, there are some differences in the degree of necessity for ellipsis and the possibility of setting on the top of the sentence.